



メルボルンのオーストラリア人剣道家たち : 謙志館 道場の事例を通して

前川, 真裕子

(Citation)

神戸文化人類学研究, 4:33-52

(Issue Date)

2011

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/81003919>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81003919>



前川 真裕子

はじめに —ホームランドを離れた文化の実践

本論考では、もともとのホームランド¹⁾を離れた非西洋の文化的実践が、移動先の地でどういった目的から実践されているかに注目する。特に、オーストラリアのメルボルンにおいて、異文化としての剣道が非日本人たちの他者への興味からではなく、「自己を表現する (expressing self)」「自己に挑戦する (challenging self)」「自己を成長させる (developing self)」といった言葉で表される自己追求と深く結びついている様子を考察する。

アパデュライの言葉を借用すれば、日本武道を含め非西洋の実践は、グローバル規模で展開される文化の浮遊 (global cultural flow) にのり、多様な人々に世界各地で実践されるようになった [Appadurai 1996:37]。それら非西洋の諸実践をめぐる研究はさまざまであるが、一様に異文化の他者に対する好奇心や憧れと深く関連していることが議論されてきた。以下で後述するように、幾つかの先行研究では、それら諸実践が実践に関わる人々の他者に対する一方的な解釈や願望を反映させるものであると議論されている。

例えば弓道は、オイゲン・ヘリゲルという1人のドイツ人哲学者により神秘的な東洋の実践と解釈され世界に普及してきたことが指摘されている。ヘリゲルはもともと禅思想に興味を持っていた。彼は日本滞在中²⁾、禅思想への関心から弓道に興味を持つようになり、弓道家阿波研造の弟子となる。ヘリゲルは弓道などの武道に禅の奥義があると考えたのである。山田が詳しく分析しているように、ヘリゲルの禅と弓道の理解は、彼の不十分な日本語会話能力のため師である阿波との会話不全や、ヘリゲルの思い込みによる日本語解釈、またドイツ語への翻訳時に不適切な誤訳があったなど誤解の産物であったことが明らかにされている [Yamada 2001]。さらに現在の研究では、阿波自身には禅についての見識がそれほどなかったとされているが、ヘリゲルは阿波の弓道を禅の思想と関連させ超自然的³⁾な解釈を導き出した [山田 2005:87; Suzuki 2005:15-43]。彼は仏教などの難解で神秘的な用語を、阿波の一手一投足に当てはめ弓道の実践に自己解釈を加えたのである⁴⁾。ヘリゲルはドイツ帰国後に日本での弓道実践をまとめた『日本の弓術』を出版している⁵⁾。『日本の弓術』は後に『弓と禅』と改訂され、世界的ベストセラーとなり今日もお多くの読者を魅了している。筑波大学の1983年の調査によると、ドイツで弓道を習う131名のうち、ヘリゲルの著作に影響され弓道を始めた者が48.9%、禅への興味から始めた者が61.1%、また日本への興味から弓道を始めた者が66.4%となっている [山田 2005:72-73]。ヘリゲルの個人的興味から始まった弓道および禅実践の追求は、『弓と禅』として出版されることで一つの神話となり世

界を駆け巡ったのである [Yamada 2001:27]。

弓道に限らず非西洋の文化的実践は、しばしばエキゾチシズムの文脈で批判的に分析されてきた。例えば、黒川は日本における「フラ実践 (Hula practice)」を「日本化 (Japanize)」されたフラであると指摘しつつも、「ハワイ」という文化的・歴史的に異なる「他者」への強い憧れを反映したものだと論じている [Kurokawa 2004:400-401]⁶⁾。黒川は、日本人実践者たちがしばしば口にする「ハワイアンのようにになりたい」という語りを分析し、実践者たちが「他者になりたい (becoming Other)」という強い願望を持っていることを指摘している [Kurokawa 2004:17]。黒川によると、そういった実践者たちは、「自然と調和した長閑なライフスタイル」という前近代的なイメージをハワイに当てはめ、日本が近代化する過程で失ってきたとされる「古き良き時代」への渴望を、他者の文化を介することで満たそうとしているのだという。黒川はこれを「辺境中心主義 (ethnoperipherism)」であると論じ、ここに異文化の他者に対するエキゾチシズムを読み取った [Kurokawa 2004:402]。黒川が論じるように、確かに日本におけるフラの実践は他者への憧れを強く反映したオリエンタリズム的なエキゾチシズムの一種であり、筆者はその分析を批判するものでもない。ところがこれから本論で紹介するメルボルンの事例のように、ホームランドを離れた非西洋の文化的実践が、他者性をそれほど意識することのない実践として人々の間に広がっている状況も無視することはできない。

まず本論では、近年注目されつつある研究の中から、サラ・ストラウスによるヨガの研究及び、クリスティーナ・ローシャによる禅の研究を紹介する。両研究と共に、ホームランドを離れた非西洋の実践に関わる人々が、健康でファッショナブルな自己に関心のある人々であることを概観する。その後、筆者のメルボルンでのフィールド調査を紹介していきたい。本論では両研究に沿いつつも、最終的に両研究では指摘されていない側面、すなわち「剣道実践 (kendō practice)」⁷⁾を通してメルボルンの実践者たちが日常とは異なる新しい場の創出を試みている様子を指摘する。特に、R氏 (男性) と K氏 (女性) の2人の剣道実践者たちの語りに注目したい。

1 日常生活の中の非西洋の文化的実践

1-1 心身の健康とヨガの実践

近年、ヨガや座禅などの非西洋の文化的・身体的な実践を対象にした学術的な研究を目にすることが多くなった [Priest and Young 2010; Pawle 2007; Murphy, Donovan and Taylor 1997; Cox 2003]⁸⁾。特にヨーロッパや北米などいわゆる「先進諸国」と呼ばれる国々では、健康科学といった分野での研究が進んでいる [Kleiner 2002:53-55; Green and Svinth 2003: 219]。人々の健康意識が高まるなか、ヨガ、座禅、空手、テコンドーなどは「フィットネス」という視点から研究対象としての注目を集めているのだ。人類学においては、サラ・ストラウスなどが「健康」という側面からヨガがどのように実践されているかを研究している [Strauss

2005]。

ストラウスは、ヨーロッパや北米からインドのリシケシュ (Rishikesh) にあるディバイン・ライフ・ソサイエティ (Divine Life Society) にヨガを習得に訪れる人々及び、北米やヨーロッパに点在するヨガ・スクールでヨガを実践する人々を対象にインタビュー調査を試みている。彼らは休暇などを活用して短期でヨガを習得する人々であったり、ヨガのインストラクターになるための長期的なレッスンを受ける人々である。ストラウスは、それら調査を行った実践者たちが「精神的成長 (spiritual advancement)」「ストレスの軽減 (stress relief)」「肉体的な健康増進 (physical fitness)」といった目的を持って実践にとりくんでいることに言及し、彼らの目的がインド・ヨガの体系的な習得ではないことを明らかにした [Strauss 2005:55]。ヨーロッパや北米の実践者たちの主な目的は、インドで長らく発達してきたヨガそのものを理解し自分のものとして習得しようというのではなく、インド・ヨガの一部分を自分たちの日々の生活範囲内で維持できる形に解釈し直し、各々の国で実践することなのだという [Strauss 2005:58]⁹⁾。ストラウスによると、彼ら実践者たちにとって重要なことは、ヨガを日常の日課 (personal routine) として実践することなのだ。以上の分析からストラウスは、こういったヨーロッパや北米のヨガ実践者たちが、文化的小および歴史的に異なる他者 (authentic others) に好奇心がある人々ではないことを指摘する。逆にヨガの実践者たちが注目しているのは、周囲からの如何なるプレッシャーに妨げられない自由な自己表現が出来る自己、煩わしい日常生活から解放されリラックスした自己、疲れきった心と体のバランスをコントロールし心身ともに健康でいられる自己なのである [Strauss 2005:58-59]。すなわち彼ら実践者たちは、健康という側面から「真正な自己 (authentic self)」の追求のためヨガを実践するのだと言う [Strauss 2005:58-59]。

ストラウスはまた、こういった北米やヨーロッパにおける「真正な自己の追求」の背景に、「ヘルス・ツーリズム (health tourism)」と呼ばれる一種の健康ブームが関係していることを指摘している [Strauss 2005:58,109]。特に彼女は、先進諸国のヨガ実践者たちの語りの中にニューエイジ思想に特徴的な「心身の健康 (wellness)」に関する諸概念、すなわち「自己の一存で行動する能力 (self-responsibility)」「自己への信頼 (self-reliance)」「自己統御能力 (self-management)」といった概念を発見している。こういったニューエイジに特徴的な自己追求への興味は、60年代以降の先進諸国において人々の間に広く浸透したものである。ニューエイジ思想というのは、もともとルソーの影響を受けた19世紀のロマン主義に起源があるとされている [Heelas 1996:42]。それまでの古典主義や教条主義が扱ってこなかった個の独自性を主張し、自我の抱える愛・不安・苦悩・夢などが注目された。例えば文学に焦点をあてると、オリエンを舞台にネルヴァル、シャトーブリアン、ラマルティエヌらが個人の愛や苦悩を表現した作品を多数生み出している [ランセ 1980:9-85]。この19世紀に起源を持つニューエイジ思想が本格的に一般大衆へと広がったのは1960年代以降のことである [Rocha 2006:114; Heelas 1996:50; Pawle 2007:7-10]¹⁰⁾。特にニューエイジ思想は、カウンターカルチャー運動と連動し若者の間で広がっていった [MacFarlane 2007]。先進国におけ

るカウンターカルチャー運動との関連でニューエイジ思想に詳しい人類学者ポール・ヒーラスによると、ニューエイジに特徴的な自己追求の思想は、カウンターカルチャーが持つ体制への懐疑や主流社会における既存の「伝統」「倫理」「信仰」「民族」といった固定概念への反発と融合していったという [Heelas 1996:23,50; 桑野 2005:77-102]。自己啓発セミナーに通う人々からヒッピーまでさまざまな人々が、これまで「自己」を抑圧してきたあらゆる主流規範に対して意識的に反発し、何者にもとらわれない自己の確立を目指したというのだ。その方法論として非西洋の文化的実践に目が向けられたというわけである。禅思想、ヨガ、武道は、啓蒙主義的な西洋近代思想へのアンチテーゼと解釈され、既存概念から脱するための実践と考えられるようになったのである [Heelas 1996:1,50; Pawle 2007:7-10]。ストラウスの調査したヨガのヘルス・ツーリストたちも、プレッシャーの多い日々の生活から自分たちの心と体を解放するため、あらゆる国境を越えて「真正な自己」を追求する人々なのである [Strauss 2005:55,58,71,109]。

1-2 ファッションとしてのモダン・ブディズム

さて、非西洋の諸実践は、健康という側面のみから注目されているのではない。近年、禅などの非西洋の実践は、ファッション誌などで特集が組まれるほど注目されている。西インドネシア大学の研究者クリスティーナ・ローシャは、このような「ファッションナブルなもの」としての非西洋の実践を、ブラジルのエリート層を中心にフィールド調査を行い、彼らの間で人気を得ている禅の実践を「モダン・ブディズム (modern Buddhism)」という視点から議論している。

まずローシャは、海外において非西洋の文化的実践である禅思想人気の背景に、自己追求への志向性が影響していることを明らかにしている。ストラウスと同じく彼女もまた、ブラジルにおける禅実践の背景に、カウンターカルチャーの一つである「ニューエイジ運動」の影響を読み取っているのだ [Rocha 2006:114]¹¹⁾。さらにローシャによると、現在世界各国で広がる禅思想は、日本で行われているような禅実践ではなくモダン・ブディズムと解釈せねばならない。というのもモダン・ブディズムとしての禅は、ニューエイジ思想と関連があり、実践に関わる人々が皆一様に自己の健康への関心が高く、座禅や瞑想を実践することで日々の生活のバランスを管理しようと試みる傾向にあるからだ [Rocha 2006:114-115]。ストラウスのヨガ実践者たちがそうであったように、ローシャの調査したモダン・ブディズムの実践者たちも、ニューエイジに特徴的な自己への興味が高い人々なのである。ローシャはあ

「禅が私の好奇心をかき立てたのは、その素朴さにあります。禅のすべては、まさにこの極めて素朴な瞑想にあり、その瞑想によって日々の生活で起こることを観察し実践することなのです。その他の宗教はしばしば宗教的な場（教会や寺）と日常生活を分断しますが、禅の実践はそれら二つを分断しはしません。禅はそ

れら二つをつなぎ合わせるのです。禅実践は座禅をしている時のみならず、日常のなかでも可能なものなのです」[Rocha 2006:114-115]¹²⁾。

モダン・ブディズムの実践者たちは日々の生活でおこる出来事を見つめ、瞑想などによって自分自身をコントロールしていくことに興味がある人々である。彼らにとって禅の実践というのは、世俗世界から切り離され神聖視されがちなその他の宗教的実践と違い、いつでもどこでも日常生活の中で手軽に行える自己反省・自己鍛錬の訓練なのである。ストラウスの分析するヨガ実践者がそうであったように、モダン・ブディズムを実践する人々もまた伝統的な禅そのものの習得を目指しているわけではない。彼らは禅の実践を通して、多忙な日々の暮らしで乱れた自身の心と体に秩序を取り戻し、管理することを目的としているのだ[Rocha 2006:114]。

ローシャはこういったブラジルにおけるモダン・ブディズムの人気を、1997年のブラジル版『ヴォーグ (CASA VOGUE)』誌を分析しつつ、アジアと欧米諸国の中流階級者たちの接触により構築されたエリート・コスモポリタニズムの一部であると位置づけている。このヴォーグ誌では、禅の実践及び禅をモチーフにしたインテリアが特集されている[Rocha 2006:128,195]。特集では、名のある建築家やインテリアデザイナーなどが招かれ、快適な都市生活を目指すコスモポリタンたちのために各々が考える「禅スタイル (Zen Style)」が披露された。ローシャ曰く、この特集は禅について紹介しているばかりではなく、禅によってトータル・コーディネートされた「ライフスタイル (lifestyle)」そのものを呈示している[Rocha 2006:127]。ニューヨークの一等地にあるヘルムート・ラング¹³⁾の店が、有名デザイナーによってチベット仏教風にデコレーションされるのが「ファッショナブル」であると考えられる世の中である[Rocha 2006:143]。それと同じように、ブラジルにおいてモダン・ブディズムの実践に理解があつて、そういうライフスタイルをおくることができることが、人々の社会的なステータスとなるのだとローシャは指摘する[Rocha 2006:143]。体制への反発から始まったニューエイジ運動の思想は、今では「トレンド的なファッション」となりサンパウロなど都市のエリート層を中心に、人々の日常生活を彩るポップなライフスタイルとなっているのだ[Rocha 2005:151]。

両研究から指摘されるのは、禅やヨガなどの非西洋の実践が、自己の心身の健全を追求するための実践として広く普及している状況及び、ホームランドを離れた先で実践者たちの日常生活の一部として取り入れられている状況である。変わって、以下のメルボルンにおける事例では剣道の実践者たちが、剣道を自己追求のための実践と捉えつつも、日常とは異なる目新しい場の創出に関心がある様子を紹介する。実践者たちの自己をめぐる語りと共に、彼らが道場という新たな場をどのように認識しているのかを報告したい。

2 メルボルンにおける非日本人剣道家たち

2-1 謙志館道場の人々

筆者が聞き取り調査および参与観察を行ったのは、メルボルンにある謙志館という道場である。謙志館はメルボルン市内のロズリン通りにある道場で、現在では剣道、居合道、杖道の稽古場になっている¹⁴⁾。筆者は彼らに混じり、剣道の稽古及び稽古以外の活動に参加することで、非日本人実践者たちの剣道をめぐる語りを記録した。本論ではその内の数名の語りを紹介する。特に R 氏と K 氏の語りに焦点を当てたいと思う。

謙志館は 1990 年にオーストラリアと縁の深い日本人ビジネスマン一家によって建造された。剣道の稽古は週 3 回行われている。日曜の稽古後は、近所にあるホット・ポピー (Hot Poppy) という名のカフェで昼食をとるのが常となっている。その他、週末のパブでの集まりや食事会、合宿などがある。また謙志館は、オーストラリア国内で数少ない日本武道のためだけに建てられた道場でもある。オーストラリアにおける剣道の稽古は、ほとんどの場合が中学校や大学の体育館あるいは地域の多目的ホールを借りる形で行われている。よって謙志館のように常時稽古場として機能している道場は少ない。そのため謙志館は、メルボルンを含むヴィクトリア州剣道連盟のハブ道場として、州内のさまざまな道場から出稽古に訪れる人々で賑わう場となっている。以下では簡単ではあるが、謙志館道場の実践者たちがどのような人々であるのかを、オーストラリアにおける「マジョリティ／マイノリティ」という概念と共に整理しておく。

道場で剣道を稽古する人々のほとんどは、オーストラリアの市民権をもった市民、あるいは永住権をもった永住者である¹⁵⁾。とはいえ、多文化的なオーストラリアを反映した、実に多様な文化的・民族的背景を持つ人々が集まっている。いわゆる「アングロ・ケルティック」、あるいは多文化主義研究者のガッサン・ハージらが「ホワイト・オーストラリアン」と呼んできたマジョリティ集団に属す人々で占められているわけではない。「マイノリティ」と呼ばれるギリシアやイタリアなど南ヨーロッパからの移民、ポーランド、イスラエル、トンガといった地域からの移民も多数含まれる。またマレーシア、シンガポール、香港、インドネシア、ベトナムなどアジアからの移民も多く、彼らの多くはすでに永住権を取得し、オーストラリアを終の住処としている人々である。

ところでこういった人々は祖先の出自を日常的に強く意識しているわけではない。少なくとも道場において、彼らが自らのエスニシティを意識しながら話すのは非常に稀なことである。筆者など、研究のために彼らの出自を詳しく聞こうとすると、「なぜそのようなことを聞くのか？」と不思議がられることが多々ある。道場に通う移民 2 世代目や 3 世代目あるいは 4 世代目の人々にとって、祖先の国というのは 1 度も行ったことのない土地である場合が多いという。たとえ血のつながった親戚縁者が祖先の国にいたとしても、すでに言葉の通じない違う国の人々になっており、数年に 1 度会うか会わないか、あるいは 1 度も会ったことがないといった具合だそう。また近年ではマジョリティ／マイノリティ集団¹⁶⁾の垣根を超

えた婚姻が進んでいる。ある人などは、「自分の母方はスリランカ人、オランダ人、フランス人の血が混ざり、父方はオーストラリア人、ドイツ人、フランス系ユダヤ人の血が混ざっているが、これで君の質問に答えたことになるか？」と答えてくれた人もいる。謙志館道場では彼のように様々な出自の祖先を持つ人は少なくないのである。また自分の記憶では不確かなので、家の者に聞いてきてから後日話したいという場合もある。

オーストラリアは、先住民であるアボリジナルの人々を除けば、さまざまな理由で渡豪してきた移民、難民、季節労働者で構成された国家である。もともとオーストラリアという国民国家は、イギリスやアイルランドからの移民を中心に誕生した。オーストラリアが公式にアングロ・ケルティック系移民以外の移民（東欧や南欧からの移民）を受け入れ始めたのはウィットラム政権下の1970年代のことである〔竹田 2000:219〕。その後、70年代後半に大量のベトナム移民を受け入れ始めるが、80年代になると増え続けるアジア系移民を前に、「ブレイン論争」と呼ばれる大きな論争が繰り広げられた。論争を通じ、オーストラリアのアングロ・ケルティック的な伝統を十分に持続できる形で多文化主義を継続していくことが叫ばれるようになったのである〔塩原 2005:60〕。『ガルバリー・レポート』は、この頃のオーストラリアにおける非アングロ・ケルティック系移民への基本的対策をまとめた政策報告書である〔RPASM 1978〕。多文化主義の初期段階であった1970年代から80年代にかけてのオーストラリアでは、非アングロ・ケルティック系移民たちは「問題を持つ人々（people with problem）」と考えられていた〔Martin 1978:78〕。レポートでは、経済的・精神的・教育的にアングロ・ケルティック的伝統を維持しようとするオーストラリアに馴染めていない移民たち¹⁷⁾の生活支援（福祉政策や英語教育）を、移民が属するエスニック・グループを仲介にすることで試みようとするものであった〔塩原 2005:50-51〕。つまりエスニック・グループが行う自助活動や新参移民へのサービスが個々の移民たちのオーストラリアへのすばやい同化を助けると考えられていたのだ。このようにアングロ・ケルティック系住民がオーストラリアを代表するもの、つまり「ナショナルなもの」と表象される一方で、非アングロ・ケルティック系住民は「エスニック」という言葉で表象される周縁的な存在であった。塩原が議論するように、近年では「ナショナル／エスニック」のあからさまな二項対立は批判の対象とされるようになってきているが¹⁸⁾、アングロ・ケルティック系住民と非アングロ・ケルティック系住民の間に横たわる差別問題は未だ議論されるべき課題を残している〔塩原 2005:173-204,192〕。

メルボルンの道場に通う人々は、オーストラリアの移民史から鑑みると、マジョリティ集団であるアングロ・ケルティック系住民とマイノリティ集団である非アングロ・ケルティック系住民のどちらも有する集団ということになる。ところが前述のように、剣道実践者たちは少なくとも道場において各々のエスニシティを常に意識しているわけではない。マジョリティ／マイノリティの区別も多様化する婚姻により曖昧なものになりつつある。また彼らは他人の出自についてもそれほど詳細に把握しているわけではなかった。例えば筆者がある実践者に「あの人のもとの出自を知っていますか？」と尋ねたところ、「さあ聞いたこと

はないが、あの人のアクセントからしてメルボルン育ちの人ではないですか？」と答えてくれた。筆者は彼女の答えを聞いて少し戸惑った。というのも筆者が聞いたかったのは、「あの人」の移民としての祖国が何処であるか、あるいは「あの人」の両親が何系の人なのかであったからだ。ところが彼女は、「どこからの移民であるのか」を軸に考えたのではなく、「あの人」の英語のアクセントを分析して答えてくれたのである。多文化主義社会であるオーストラリア社会を対象にした研究は、「マジョリティ／マイノリティ」の政治的なポジショニングが中心的な議論となることが多い¹⁹⁾。それゆえ、研究対象となってきた人々には常に「〇〇系のエスニック・マイノリティ」や「アングロ・ケルティック系の人々」といった形容詞が付けられてきた。本論で紹介する人々は、これまでの研究であまり注目されることのなかったオーストラリアの住人、つまりマジョリティ／マイノリティの区別や、何系のエスニック集団に属するのかといった範疇では語ることでない人々である。

2-2 「何か目新しい (something new)」場としての剣道

さて、謙志館道場に集まる多様な人々に「剣道を始めた理由は何か？」と聞くと、様々な答えが返ってくる。両親がそれぞれアングロ・ケルティック系住民と非アングロ・ケルティック系住民の出身者である S・C 氏は、それまで剣道のことなど考えたこともなかったが、たまたま犬の散歩をしていたら「謙志館道場」と書かれた建物を見つけ、興味本位で中に入ってみると剣道という日本の武道をしていたという。気に入ったのでそのまま入会し現在にいたると話してくれた。また両親がエジプトからの移民である P 氏のように、日本のことなど全く興味もなく何の知識もなかったのだが、妹に誘われてなんとなく道場を見学に行った。するとなんだか今までに見たこともない「何か目新しいもの (something new)」²⁰⁾に出会え、その見たことの無い武道に挑戦してみたくなったという人もいる。さらにインドネシア系オーストラリア人の L 氏からも同じような語りが聞かれた。L 氏もまた、もともと剣道や日本に興味があったのではないと言う。彼が剣道に興味を持ったのは単なるエクササイズ目的であると話してくれた。ところが最近のオーストラリアで流行しているスポーツや武道（空手やテコンドーなど）には興味が湧かなかった。L 氏曰く、空手やテコンドーを含め人気の高いスポーツなどは珍しさに欠けるというのだ。一方剣道は、オーストラリアにおいてそれほど知名度が高くない。他の人々とは異なる「何か目新しいもの (something new)」²¹⁾に興味があった L 氏にはうってつけであったのだと語ってくれた。また長年に渡り謙志館道場で剣道を教える剣道 5 段の P・S 先生に質問したところ次のように教えてくれた。P・S 氏は幼いころからオーストラリアン・フットボール (AFL) やクリケットなどオーストラリアの男子なら誰もが興味を持つだろう「普通」のスポーツにまったく興味がなかったのだと言う。オーストラリアにおける AFL やクリケットと言え、ナショナルなスポーツとして熱狂的な指示を集めるスポーツである。しかし P・S 氏は今でもクリケットや AFL に興味がなく観戦することはない。P・S 氏は幼少期より常に「何か目新しい (something new)」²²⁾ことはないものかと探しており、ある日たまたま学校で友達になった日本人男子から柔道

のことや日本のことについて聞くことになる。剣道、弓道、空手への興味はその時からだと語ってくれた。

こういった「何か目新しいもの (something new)」として表される剣道実践は、「成長する (developing self)」「挑戦する (challenging self)」「表現する (expressing self)」という自己への興味に関連するものとして表現されることもある。ストラウスやローシャの事例にあるように、剣道の実践者たちもまた、自分が思い描く自己を実現させるために剣道に取り組んでいる。例えば J 氏²³⁾の場合、剣道という目新しい実践は「自分自身に挑戦する (challenging self)」²⁴⁾ための場であると表現してくれた。彼によると剣道の稽古というのは肉体的に非常に厳しい。特に夏など、稽古中に脱水症状などで倒れる者もいる。J 氏は、そういった厳しい稽古に耐えることで、少しずつ自分の肉体と技が磨かれていくことに魅力を感じているという。そして彼は自分の限界へと挑戦し続けるのが剣道の醍醐味なのだと語ってくれた。以下ではより詳細に実践者たちの自己への関心を分析するため、R 氏と K 氏の語りに注目していく。

R 氏は 50 代の男性で、イギリスからの移民 4 世代目にあたる人である。R 氏もまた剣道に深い思い入れがあったわけではなく、息子の A 氏にたまたま誘われて道場に入会してきた人だ。たまには息子と共に余暇を活用し何か新しいことを始めてみるのも良いと思ったという。そんな R 氏によると、剣道の良さの一つは、稽古を続け月日を重ねれば重ねるほど道場のメンバーに認められ受け入れられるようになることだという。彼は「成長 (developing self)」という表現を用いながら、長期に渡る剣道実践の継続が、コミュニティの成員としての立場を確立することにつながると話した。さらに R 氏は筆者に、その継続が積み重なりやがては周囲からの信頼を集めるようになることを強調し、そのうち自分も道場の重鎮として (sit on big boy's table)²⁵⁾、新しく入ってきた者を教え導き次の剣道家を育てることが出来るようになれば嬉しいと語った。

また R 氏は剣道という場に特別な感情を持っている。彼曰く、剣道のために道場に集まる実践者たちの間では、年齢や職種に関係なくお互いが単なる 1 人の剣道家どうしとして接し合うことができる。謙志館には、多様な出自を背景に持つ人々がいるが、それらの人々はまた、政府のエンジニアや高校教師、大企業の役員や不動産会社の経営者など色々な職種の人々でもある。R 氏自身はスーパーの倉庫で物流管理をしており、彼は自分自身の職業や学歴のことを社会的に高いステータスがあるとは認識していない。R 氏によると、剣道の稽古に來る人々は、彼が普段の生活の中で職種や学歴が壁となり親しくつき合うことができないような人々である。ところが道場では、そういった人々が自分のことを一剣道家として分け隔てなく扱いつき合ってくれる²⁶⁾。R 氏が剣道に魅力を感じ稽古を継続しているのは、自己の肉体的鍛錬にのみ意味を見いだしているからではなく、彼を受け入れ成長を促してくれる場に意味を見いだしているからでもあると話してくれた。

このように R 氏にとっての剣道実践は、既存の「社会的ステータス」というしがらみから解放されたものであり、日常生活では得ることの出来なかった「自己」を創出することが

出来る場として捉えられている。実はこういった「既存の社会からの自由」という語りは、その他の実践者からもしばしば聞かれることである。例えば K 氏は、この目新しい剣道実践を既存の社会から離れ自己を自由に「表現する (express)」²⁷⁾場であると語り、剣道実践の良さを「強烈さ・激しさ (intensity)」²⁸⁾という言葉で表現してくれた。K 氏は 20 代女性で、2010 年にメルボルンにある大学 (RMIT) の修士課程で作家コース (creative writing) を修了した。彼女は地元メルボルン育ちで、その先祖を何世代か遡ればドイツやイギリスからの移民だったという。K 氏も剣道についての知識をそれほど持たず道場に入会してきた人である。アマチュア的女子プロレスや乗馬の経験者で、新しいものに挑戦し続けることが人生の楽しみだと語ってくれた。

K 氏によると、剣道実践は日常生活で押さえてきた「自分」を思う存分曝け出し表現することが出来る場を与えてくれるのだと言う。周囲の反応を気にすることなく、自分が内に秘めていた闘争本能を剥き出しにして相手に稽古を挑むことができるからだ。特に女子プロレスの経験者である彼女は、体を使って相手にぶつかることに興味を持っているようであった。彼女にとって稽古中に自分自身を思う存分に表現することができる剣道は、日常生活で押さえねばならなかったものから完全に自由でいられるもう 1 人の自分のための時間というわけである。

彼女はまた、日常生活と対比させながら剣道実践は誰もが気楽に実践することのできないものだとして表現してくれた。K 氏は自分の家族のことを「彼ら (they)」と呼び、道場に集う人々や自分自身と区別している。K 氏によると彼女の家族のような人々は「西洋的な (Western)」²⁹⁾価値観しか知らない普通のオーストラリア人なのだという。そんな家族に剣道のことを話した時、家族の何人かから次のような意見が出された。彼女の家族は、娘や姉が熱心に励んでいる剣道という日本の武道の知名度が上がれば良いと考えていたようで、K 氏に剣道がオリンピック種目になれば良いと思うと話したのだ。オリンピック種目になれば、知名度が上がり柔道のように誰もが知るところとなるからだという理由からだ。また K 氏の家族は、剣道がオリンピック種目になることで様々な大会も開かれ、各大会に K 氏が出場して多くの選手と腕を競い合い活躍することを期待しているらしかった。K 氏は著者に、こういった家族らの意見に同意できないと語った。彼女は剣道の知名度が上がれば良いと思ったことも無ければ、大会で誰かと競い合うために剣道をしているわけではないのだと言う。K 氏によると、彼女の家族のような「普通の人々」は、剣道をその他のどこにでもあるスポーツと同じように扱う。彼女やその他の実践者たちがどのような意図で剣道を実践しているのか全く理解できないだろうと言うのである。以上のような彼女が話す家族についての語りは、彼女が剣道が柔道のように世界的な人気を得る実践になってしまうことを好ましく思っていないことを示している。事実 K 氏は剣道がオーストラリアで「普通の人々」も気軽に楽しむポピュラーな実践になることに肯定的ではない。K 氏はさらに筆者との会話の最後に、「剣道は謎めいたもの (mystic) でなければ意味が無いわ」³⁰⁾と付け加えた。筆者は会話の始めに彼女の口から「西洋的な」という言葉が出たので、てっきり「神秘的 (mysterious)」

なという意味で「謎めいた (mystic)」という言葉を使ったのだと思った。ところが彼女に、剣道を普通のオーストラリア人が理解しがたい「神秘的な東洋の実践」だと思っているのかどうか聞いてみると、K氏は慎重に考えながら「うーん、そういう意味ではないの」と答えた。確かに、この日の私との会話において、彼女のもつぱらの関心は、彼女が「彼ら」と呼ぶ「オーストラリアの主流社会」と、それに対立する形で存在する自分自身である。つまり、ここでK氏が自らの「家族（普通の人々）」と対比させる形で説明する「謎めいた剣道」とは、会話の文脈から考えて「普通の人々」が簡単に介入できない何かを表象していると考えるのがより妥当である。

ここで以上のような自己の追求の場としての剣道を、本節の始めに紹介した「剣道実践者たちが剣道を始めた理由」と共に改めて考えてみたい。エジプト人の移民を両親に持つP氏は、剣道を始めた理由に、剣道が自己にとって「何か目新しい (something new)」ものであったからだと話してくれた。長年に渡り謙志館道場で稽古をつけるP・S氏もまた、剣道を始めたきっかけは、オーストラリアの主流社会で考えられているような既存のアクティビティではない剣道に自己の嗜好を満たす「何か目新しいもの (something new)」を見いだしたからである。また主流社会との関連で考察すると、R氏とK氏の語りも興味深い。K氏の場合、剣道の実践は彼女が考える「普通の人々」から彼女自身を分離させるものであったし、R氏は日常生活では実現できないであろう道場の人々との関係性から新たな自己を創出していた。実はこの「何か目新しいもの (something new)」といった表現は、今回紹介できなかった実践者たちの言葉にもあった。そういった人々もまた剣道が持つ自分たちの生活範囲には無かった目新しさに引かれたのだと言う。彼らメルボルンの剣道実践者たちは、剣道に「これまでの生活にはなかったもの」を求めていたと考えられる。彼らは総じて、日常生活とは少し異なる「差異」を取り入れながら、理想とする自己を追求する人々なのである。

2-3 衣服と洗面器具

しかしながら、以上のようなメルボルンの剣道実践者と、ストラウスやローシャが調査したヨガやモダン・ブディズムを完全に同一視してしまうことは出来ない。ヨガやモダン・ブディズムの実践者たちは、それぞれの実践を自己の生活の一部として解釈し直し、ストラウスがヨガ実践の特徴として上げているニューエイジ的な「自己の一存で行動する能力 (self-responsibility)」や「精神的な向上 (spiritual advancement)」といった「自己追求」を日常生活内部で実践しようとする。一方、メルボルンの実践者たちは、自己を追求することに興味を持っているという点ではヨガやモダン・ブディズムの実践者と共通するが、必ずしも日常生活の一部として剣道を捉えていない。というのも以下で分析する通り、「自己への追求」はメルボルンの実践者たちの場へのこだわりと密接に関わっているからだ。

メルボルンの調査から見てきたもう一つの特徴は、剣道の実践者たちが道場という空間を特別な場であると認識しているということだ。メルボルンでは、実践者たちはこれまで味

わったことの無い「何か目新しい (something new)」空間として剣道実践を日常生活から区別している。例えば R 氏は、道場では日常世界での人間関係、職種、学歴といった諸々の常識を括弧に入れることができると考えていた。また K は剣道がポピュラーな実践になることを嫌悪し、「オリンピック競技になれば良いのに」という家族の意見を退けている。ヨガやモダン・ブディズムの実践者のように日常生活そのものに取り込もうというわけではないのだ。このような特定の場の特別視は、ヨガやモダン・ブディズムの調査から報告されていない。ローシャのモダン・ブディズムの実践者たちが、教会や寺などの空間を特別視することを嫌い、モダン・ブディズムの実践を自己の日常生活の中に位置づけているという語りとは大きく異なる点である。メルボルンの実践者たちは、むしろ日常生活と剣道実践の空間を個別のものとして区別しているのではないだろうか。というものの本論で紹介した剣道実践者たちは皆一様に、「差異 (something new)」を生み出すことに焦点を置いているからである。その「差異」の対立項に上げられるのは「彼らが良く知る日常の生活」である。剣道実践者たちは、剣道実践に日常の生活とは「何か異なる差異 (something new)」を発見することで、その差異を保持しながら自らが属す日常社会との距離を創出している。

ところで剣道の実践者たちが求めている「差異」というのは、従来のオリエンタリズムなどの他者表象をめぐる研究で指摘されてきた種的同一性の罠に陥る「自己とは本質的に異なる他者性あるいは異質性」のことではない。例えば、「日本を理解する」あるいは「東洋の神秘思想を理解する」ために剣道を学ぶというのならば、本質主義的で典型的なオリエンタリスト的発想³¹⁾から他者を消費していると言えるだろう。なぜならそこには、自己とは本質的に異質であると想像された東洋の「他者」がアプリオリに前提とされており、肯定的にしる否定的にしる人の好奇心はその「他者」へと向けられているのだ。これを仮に「オリエンタリズム的な自己」と呼ぶなら、そういった「オリエンタリズム的な自己」とは「本質的に異質な他者」を生みだすから成立する「自己」である。例えばキャロル・ブリッケンジは、オリエンタリズム的な自他の創出を、英国植民地下のインドにおけるイギリス官僚と彼らのモノの収集を例に分析している。イギリス人官僚たち一人ひとりにとって、植民地で手に入れたものをコレクションすることは重要な作業であったという。ブリッケンジによると、官僚たちの「コレクションする」という行為は、彼らが自らのインドにおける経験に秩序を与える行為だったと指摘する。同時にこの秩序付けは、インドそのものを認知的・物理的に自分たちの管理下に置いているという「イリュージョン」、あるいは錯覚空間をつくりだすことでもあった [Breckenridge 1989:211] ³²⁾。このようにオリエンタリズム的な他者表象の特徴は、「異質な他者」のイリュージョンをつくりだし、その異質性を管理することが出来る「自己」を演出することで成立していたと考えられる。

ガッサン・ハージは、このようなオリエンタリズム的な自己演出を、「見せる権力」あるいは「自己呈示をめぐる権力」とであると批判し議論を展開している。ハージはまず、人が彼／彼女自身の外見を管理しようとする、あるいは彼／彼女が自分たちの外見的に望む理想に近づこうとすることを、社会的規範に適応した身体になりたいという願望であると議論

する [Burgelin 1979:25 quoted in Hage 2000(1998):150-151]。彼はオリビエ・バージェリンに
ない、衣服の社会的意味に注目する。例えば洗面道具というのは、個人の身体を社会的な
身体へと仕上げるための道具であるが、それらはしかし公的な眼差しに曝されることなく私
的な空間でのみ使用される [Burgelin 1979:25 quoted in Hage 2000(1998): 150-151]。一方、衣
服というのは、道具のみとして使われる洗面道具たちとは異なり、
道具でもあり身体そのものでもあると言う [Burgelin 1979:25 quoted in Hage 2000(1998):
150]。要するに衣服は、身体の一部あるいは代用として、公に曝されることで意味をなし、
時に身体の一部となりながら目に見える形で個人の自己呈示を助ける。ハージはこれを「呈
示機能 (presentational function)」と名付け、多文化主義国家であるオーストラリアの権力様
式と相関させながら論じる。ハージによると、オーストラリアにおいて非西洋に由来の文化的
諸実践は、オーストラリアというナショナルな空間で展示されることで意味をなす。それ
ら諸実践は公に呈示されることで、オーストラリアというナショナルな身体 of 衣服となるの
だ。オーストラリアを一つの意思ある主体に例えたとするならば、移民たちの諸文化を寛容
に受け入れている様は、それらを上手く着こなしている (あるいは管理している) 自己演出
なのである [Hage 2000 (1998):141-164]。

今回紹介したメルボルンの剣道家たちにとって、剣道の実践がどのような機能を持つのか
を考えるとすると、日常社会から距離を置くための機能、あるいは日常生活から少しの間
だけ離脱するための機能 (the function of retreat) を持っていると考えられることはい
ろうか。というのも彼らの好奇心は、異質な他者を理解し管理することができる自己呈示に向
けられているのではなく、自己表現の一つとして日常社会からの差異化に向けられているか
らだ。筆者が紹介した剣道の実践者たちは、そういった特殊な空間としての道場で、剣道実
践を通して自己の追求を試みようとする。本論冒頭で紹介したドイツ人弓道家ヘリゲルやフ
ラダンスの実践者たちと違い、剣道実践者たちの関心は他者へ向けられてはおらず、ゆえに
神秘的なオリエンタリズムへの憧れや好奇心については触れられていない。事実 K 氏は「謎めい
たもの (mystic)」という表現を用いながらも、その語りには、自己とは本質的に異なる他
者の想像は確認されなかった。また R 氏の語りに見られるように、剣道実践及び道場とい
う場合は、日常生活の諸事によって介入されない特殊な空間を創出していることが分かった。
彼らは、剣道実践を自己呈示のための道具として認識しているのではなく、日常生活とは違
う「何か目新しい (something new)」空間を提供してくれる場として認識しているのである。

おわりに

本論では、ストラウスやローシャのフィールド調査と比較しながら、剣道という日本にま
つわる実践がホームランドを離れたオーストラリアでどのように機能しているのかを論じ
てきた。本論では、「剣道＝日本の武道」という表象を一時保留し、フィールド調査で得ら
れた情報を考察しながら、海外における剣道実践を再考察しようと試みた。実際にメルボル

ンで剣道を実践する人々を調査し、従来の議論にあるような非日本人剣道実践者たちの「神秘的なオリエンタリズム」への入り口として剣道が消費されているのか否かを明らかにするためである。また、これまでの人類学的研究では、メルボルンのような多文化社会は、ホワイイトネス研究やアボリジナル研究の対象とされることが多かった [Jupp 2002; Jakubowicz et al 1984; Hage 2003; Hollinsworth 1992]。それらの研究で焦点があてられてきたのは、抑圧者としてのアングロ・ケルティック言説や、アボリジナルの先住性に焦点をあてた政治的マイノリティのアイデンティティ・ポリティクスである [Haggis 2004; Moreton-Robinson 2004; Hollinsworth 1992]。しかし今回のフィールド調査で紹介したのは、多文化社会メルボルンで各々の出自集団をことさら意識せずにいられる場と、異文化の実践を日々の楽しみに暮らす人々である。筆者が注目したのは、各々の出自をことさら強調することない人々の生活及び、異文化の実践を媒介に人々がどのように自己の生活空間を構築していくのかということである。

¹⁾ 「ホームランド (homeland)」という言葉は、メルボルン大学の研究者 Tamara Kohn (anthropology) の論文を参考にした表現である。Kohn は、イギリス、アメリカ合衆国、オーストラリアに広がりつつある合気道の人類的研究を行っている。彼女は「ホームランド」と言う言葉を、「ある武道を生み出し長年に渡り育んできた土地」という意味で用いている。適切な和訳が思い浮かばなかったため、Kohn の言葉をそのまま借用した。Kohn, T. 2011 "Appropriating an Authentic Bodily Practice from Japan: on 'being there', 'having been there' and 'virtually being there' ", in Strang, V. and M. Busse (eds), *Ownership and Appropriation* (ASA monograph), Oxford: Berg, p. 65 を参照のこと。

²⁾ ヘリゲルはドイツ人哲学者で、1924 年から 1929 年まで東北帝国大学に招かれ、講師として日本に滞在した。東北帝国大学では新カント派についての講義を担当している。

³⁾ ここで意味する「超自然」とは以下を意味する。ヘリゲルは『弓と禅』において、阿波がヘリゲルに説明した弓道の極意の一つを「それが射た」とドイツ語に訳し紹介している。ドイツ語の「それ (Es)」には英語の「それ (It)」と同じように独特の意味があり、人智を超えた力を指す。ゆえにヘリゲルがドイツ語で、阿波先生は「それが射たと説明されたのです」と言うとき、阿波が人の力を超えた何者かにつき動かされて弓を射たという超自然的な現象を指すことになる [山田 2005:82]。また山田の指摘によると、実際に阿波が自分の射た弓を「それが射た」とヘリゲルに説明したかどうかは疑わしい。ヘリゲル以外の弟子が同じような説明を受けた痕跡がないことから証明されるという [山田 2005: 78]。

⁴⁾ ある夜の稽古で阿波は暗闇の中、第一の矢を的に命中させ、さらに第二の矢を第一の矢の筈に命中させたことがあった。安沢は阿波本人からその時の出来事を次のように聞いている。安沢:「あの時、礼射をやったんだ。甲矢が中って、乙矢がターツという何かにブツツかった様な音がした。それからあと、オイゲンさんがいくら経っても帰ってこないんだ・・・それからまあオイゲンさんが的の前にちゃんと坐っている。先生がこうやってそば行って (のこのこ出掛ける格好)「どうしたんだ」と云うと、声もださずにオイゲンさん凍てついた様に坐っている。(中略) 先生は、「いや、あれはただの偶然だよ」、「こんなこと別におれとしては見せたつもりでもねえんだ」と云うんだ。一方、ヘリゲルの『弓と禅』には、その時の出来事が次のように解釈されている。「甲矢の方は別に大した離れ技でなかったとあなたはお考えになるでしょう。何しろ私はこの塚とは数十年來なじんできているので、真暗闇の時ですら的がどこに在るか知っているに違いないというわけですね。そうかも知れません。また私はいい訳しようとも思いません。しかし甲矢にあたった乙矢—これをどう考えられますか。とにかく私は、この射の功は“私”に帰せられてはならないことを知っています。“そ

れ”が射たのです。そしてあてたのです。仏陀の前でのように、この的に向かって頭を下げようではありませんか」となっている [山田 2005:86-87]。

⁵⁾ これは後にヘリゲル自身による改訂版で『弓と禅』と訳され今日にいたる。

⁶⁾ 黒川は日本におけるフラ実践は、「ハワイ」という文化的・民族的に異なる「他者」への強いあこがれを反映したものだと議論している [Kurokawa 2004:400-401]。日本のフラ音楽は、ハワイのそれには見ない独自の歌詞を生み出している。黒川は、日本風にアレンジされた独自性の強い日本のフラ音楽を、「Japanize」されたフラであると指摘している [Kurokawa 2004:17,83-84,403]。ところが一方で、日本におけるフラダンスの語りは各年代によってさまざまに変化しており、ハワイという「他者」を強く意識したものでもある。例えば 1930 年代の「近代的なアメリカ文化」としてのフラや、近年の「日本が失いつつある原始の文化が残る南の楽園」としてのフラなどである。黒川はこれを「他者になりたい (becoming Other)」という憧れの現れであると論じ、ここにオリエンタリズム的な他者表象を読み取っている [Kurokawa 2004:17]。

⁷⁾ 英語の「*kendo practice*」を筆者が日本語訳にしたもの。

⁸⁾ Reginald Pawle は精神医学的な観点からアメリカにおける禅の実践を次のような研究を進めている。禅思想は、アメリカにおいてカウンターカルチャーの一つとして受け入れられてきた。またアメリカに限らず、禅の実践は先進諸国で社会的な大きな流行になりつつある。また彼は、アメリカ社会における一般的な教養理念に、「分離と個性化を強調し、選択を行う能力を促し、自己評価を改善し、自分の個性を発展させることを奨励する」というイデオロギーがあるのだと指摘する [Pawle 2007:7-10]。しかしこういった自己には解消すべき欠点もあって、精神分析家のマーク・エプスタインは、そのうちの一つに過度な自己愛であるナルシズムをあげる [Pawle 2007:7-10]。現在アメリカでは心理学的な観点から、このナルシズムを解消しつつ自己の個性を保つ実践として禅が注目されている。特に禅の特徴の一つである「体験ありき」という方法論に脚光があたり、大量の関連本が書店に並ぶようになったという [Pawle 2007:7-10]。自己の判断で選択し、自己と他者を明確に分離させつつも、過度な分別による理性の働きを抑えるため、何も考えずに「まず体験をしてみる」ことを促す禅に価値が見いだされているわけである [Pawle 2007:7-10]。

⁹⁾ ストラウスによる北米やヨーロッパの実践者たちは、「西洋のヨガ実践者たちは、インドの伝統的な体系としてのヨガに興味をしめしているのではない」 [Strauss 2005:58]。それらの人々は、「インドから本国に帰国した際にヨガの実践を個人の日課と出来るようにすること」、また「多忙な日常生活に差し障りの無いようにヨガを学ぶ」ことを主眼としているという [Strauss 2005:58]。続けて彼女は、「心身の健康に敏感な西洋諸国のヨガ求道者たちは、他者への興味ゆえにヨガを学ぼうとするのではなく、外部からの抑圧に阻害されることなく真に自分の思うままリラックスして暮らせる自己 (an authentic Self) を追求しているのである」と分析している [Strauss 2005:58]。「この場合、真正性とは日常のさまざまな局面で肉体的・哲学的に自己を管理することで、乱れがちな心身のバランスを整えることを意味する」 [Strauss 2005:59]。

¹⁰⁾ 「多様な宗教が混在するブラジルにおいて、禅がこの地に根付いたことは不思議な話ではない。事実、禅は幾つかの小さな集団に広がり実践されていた。しかし 1980 年代から 90 年代にかけて広がったニューエイジ運動は、それまで小規模な集団内部で注目されていただけの禅を、より大規模なものへと変えて行った。特に上流・中流階級に属する白人層にまで押し広げたという点で特徴的である」 [Rocha 2006:95]。

¹¹⁾ 「ブラジルにおける仏教の人気にはカウンターカルチャーとして広がったニューエイジ思想の影響がある。ニューエイジ思想はアジア諸国と西洋諸国のエリートたちの接触により広がったもので、特に 19 世紀以降に反西洋化 (the threat of Westernization) の意識が高まるなか顕著となった」 [Rocha 2006:114-115]。

¹²⁾ この部分はあえて日本語訳せず原本のまま註に引用する。ローシャが英語で書きおし

たヨガ実践者の細かいニュアンスを描写するためである。“What called my attention to Zen was mainly its simplicity. Zen is very much this *experience of meditation*, it's to *practice* and *observe* what happens in your daily life. Zen does not make this separation, as the majority of other religions do, between the religious place, where you practice (the temple, the church), and your normal, daily life. Zen puts these two things together. The practice is not only when you do *zazen*, but it is also something you'll practice in your daily life” [Rocha 2006:114-115] .

¹³⁾ 世界的に有名なファッションデザイナー。

¹⁴⁾ 数年前までは長刀の稽古場でもあったが、現在では長刀の師範である日本人女性が帰国してしまい、稽古は行われていない。

¹⁵⁾ その内の幾人かは、インドネシア、中国、イスラエルなどからの留学生もいる。それらの学生は、卒業後オーストラリアに残り仕事をすると言う人がほとんどである。彼らの話題に頻繁に登場するのは、永住権をめぐる話で、「どうすれば最短で永住権取得を獲得できるか」と情報を交換しあっている。実際に私なども、「卒業後はオーストラリアに残るのか？」とうんざりするほど繰り返し聞かれる。

¹⁶⁾ オーストラリアにおいてエスニシティ（民族）とは、政治的主流派であるアングロ・ケルティック集団（ホワイト・オーストラリアン）に属さない人々のことを指す。例えば塩原は1970年代のオーストラリアにおける公定多文化主義言説を説明しながら次のように議論している。「公定多文化主義言説において、こうした「エスニック」という集団的カテゴリーは、「ナショナル」なるものと対立するものとして位置づけられていた。そして、そこにおいて「ナショナル」として想定されていたのは、英国・アイルランド系（「アングロ・ケルト」[Anglo-Celtis]）住民と、その文化や生活様式に他ならなかった」[塩原 2005:51]。

¹⁷⁾ ユーゴスラビア系、中国系、ギリシア系、イタリア系、マルタ系 [塩原 2005:52]。

¹⁸⁾ EAC は 1978 年に設立された「エスニック問題委員会 (Ethnic Affairs Commission)」のことである。NSW 州政府により非アングロ・ケルティック系移民に対する福祉サービス提供が主な機能である。ところが 1999 年から 2000 年にかけて、EAC 委員会の名前に「エスニック」という文字が入っていることが問題視されるようになった。「エスニック」という名前そのものが、まるでオーストラリアがアングロ・ケルティック住民と非アングロ・ケルティック住民に分断されている国のようだという意見が出されたのである。詳しくは塩原良和 2005『ネオ・リベラリズムの時代の多文化主義』p.178 を参照のこと。

¹⁹⁾ 例えば代表的な研究を上げると、塩原良和 2005『ネオ・リベラリズム時代の多文化主義』文昇堂、関根政美 2000『多文化主義の到来』朝日選書、竹田いさみ 1991『移民、難民、援助の政治学-オーストラリア国際政治』勁草書房、James Jupp (2002) *From White Australia to Woomera: The Story of Australian Immigration*, Melbourne: Cambridge University Press, Andrew Jakubowicz et al., (1984) *Ethnicity, Class and Social policy in Australia*, Kensington NSW: Social Welfare Research Centre, University of New South Wales, Ghassan Hage (2003) *Against Paranoid Nationalism*, Annandale: Pluto Press など枚挙に遑が無い。一方で本研究のように、オーストラリア社会でマジョリティ/マイノリティの垣根を超えて多様な人々が 1 つの実践を媒介に集団を形成している事例研究は少なく、代表研究と言えるようなものはまだない。

²⁰⁾ この「something new」という言葉は実際に P 氏が語ってくれた言葉である。

²¹⁾ この「something new」も L 氏自身の言葉である。

²²⁾ このときの「something new」も実際に P・S 氏が語ってくれた言葉である。

²³⁾ J 氏の出自については詳しく聞き取り調査をすることができなかった。J 氏は地元メルボルンの育ちで、外見のみで判断するとコーカソイド系オーストラリアンである。20 代男性である。J 氏の父は長年メルボルンで会社経営をしており、日本との取引が多いという。小さい頃から取引先の日本人ビジネスマンと家で会食をしたりしていた。また武道一般に興味をもっており、弓道実践の経験もある。

²⁴⁾ これは J 氏が実際に話してくれた言葉である。

²⁵⁾ これは R 氏自身の言葉である。

- ²⁶⁾ この話は筆者が R 氏に、彼の職業を尋ねた時に語ってくれた話である。
- ²⁷⁾ この言葉もまた K 氏自らの言葉である。
- ²⁸⁾ この言葉は K 氏自身の言葉である。
- ²⁹⁾ この言葉は K 氏自身の言葉である。
- ³⁰⁾ この言葉は K 氏自身の言葉である。
- ³¹⁾ とはいえ、ここで言う「オリエンタリスト」とは植民地主義の文脈で批判的に議論されてきたオリエンタリストと少し異なることを指摘しておかねばならない。従来、文化人類学において批判されてきたオリエンタリズムは、植民地支配によって生まれた抑圧者と被抑圧者の権力問題と深く関連していた。そこでは支配する側と支配される側の二項対立が明確に浮き彫りにされてきた。ところが本論で紹介したメルボルンの事例では、抑圧／被抑圧の明確な二分法を読み取ることはできない。メルボルンのフィールドで出会った人々は、先進国オーストラリアで教育を受け、英語圏で普遍的に信じられる価値規範を身につけてきた人々ではあるが、同時にそれぞれ独自の出自集団を持つということも忘れてはならない。
- ³²⁾ 「植民地世界を私有化しようとする願望は、植民地の英官僚たちにみられる一種の戦略である。個々人の官僚たちにとって、植民地で手に入れたモノを収集し蓄積することは、自分たちがインドを管理しているというイリュージョン（錯覚）を認識論的に体験することができた装置なのである。多くの英官僚が収集に夢中になっていたことから、モノの収集に介在された英官僚たちのインドを管理したいという願望は、彼らの間で共通の認識となっていたと考えられる。同時に、それら収集されたモノたちは 19 世紀後半に登場し始めた 2 つの公的機関、すなわち博覧会と博物館におさめられることになる。よって、植民地の英官僚が養ったインドに対する管理の認識は、宗主国のメトロポリスにまで持ち帰られることになったわけである。メトロポリスの博覧会や博物館では、収集されたモノたちは遠いエキゾチックな異国の戦利品として、またヴィクトリア朝が掌握する植民地と世界の秩序の証として鑑賞された」[Brickenridge 1989:211]。

参考文献

桑野弘隆

- 2005 「カウンターカルチャーとは何だったのか？カルチュラル・スタディーズの初期研究の検討をつうじて」『Rikkyo American Studies 27』(The Institute for American Studies)Rikkyo University. pp 77-102.

竹田いさみ

- 2000 『物語オーストラリアの歴史-多文化ミドルパワーの実験』中公新書。

ドミニック・ランセ

- 1980 『十九世紀フランス文学の展望』白水社文庫クセジュ。

塩原良和

- 2005 『ネオ・リベラリズム時代の多文化主義：オーストラリアン・マルチカルチュラルizmの変容』三元社。

山田契治

- 2005 『禅という名の日本丸』弘文堂。

Alter, J

1992 *The Wrestler's Body: identity and ideology in North India*. University of California Press.

Appadurai, Arjun

1996 *Modernity at large: cultural dimensions of globalization*. University of Minnesota Press.

Breckenridge, Carol

1989 "The Aesthetics and Politics of Colonial Collecting: India at world fairs." *Comparative Study of Society and History*. No.31:195-216.

Budden, Paul

2000 *Looking at a far mountain: a study of kendo kata*. Boston: Tuttle publishing.

Corbey, Raymond

1993 "Ethnographic Showcases, 1870-1930." *Cultural Anthropology*. Vol.8. no.3: 338-369.

Cox, R

2003 *Zen Arts: an anthropological study of the culture of aesthetic form in Japan*. London: Routledge Curzon.

Donohue, John. J

1994 *Warrior dreams: the martial arts and the American imagination*. Bergin&Garvey.

Friman, H. Richard.

1998 "The Art of Regulation: Martial Arts as threats to Social Order." *Journal of Asian Martial Arts*. Vol.7. November 3.

Green, T and Svinth, J

2003 *Martial Arts in the Modern World*. Westport CT: Praeger Publishing.

Hage, Ghassan

2000 *White Nation: fantasies of white supremacy in a multicultural society*. Routledge in association with Pluto Press Australia. first reprint.

2003 *Against Paranoid Nationalism: Searching for hope in a shrinking society*. Pluto Press Australia.

Haggis, Jane

2004 "Beyond race and whiteness? Reflections on the new abolitionists and an Australian critical whiteness studies." *borderlands e-journal*. Vol.3 Number 2

< http://www.borderlands.net.au/vol3no2_2004/haggis_beyond.htm > (7 December 2011)

Hickok, R

1977 *New Encyclopedia of sports*. New York: MacGraw Hill.

Hollinsworth, David

1992 "Discourses on Aboriginality and the Politics of Identity in Urban Australia." *Oceania*. Vol.63, No.2:137-155.

Holmes, R.M

- 1971 "Counter culture: some anthropological implications." *Lambda Alpha Journal of Man*, v.3, no.2: 20-33.
- Jones, David. E
- 2002 *Combat, Ritual, and Performance: Anthropology of the Martial Arts*. Praeger.
- Kiyota, Minoru
- 1995 *Kendo: Its Philosophy, History and Means to Personal Growth*. London: Kegan Paul International.
- Kline, Sally and Lucas, George
- 1999 *George Lucas: Interviews*. University Press of Mississippi.
- Kleiner, C
- 2002 "Mind-body fitness: Yoga booms in popularity as a way to heighten flexibility, improve breathing, and gain sanity." *US News World Report*. May 13: 132 (16):53-55.
- Kohn, T
- 2011 "Appropriating an Authentic Bodily Practice from Japan: on 'being there', 'having been there' and 'virtually being there' " in *Ownership and Appropriation*. Strang, V. and M. Busse (eds.), pp65-86. Oxford: Berg.
- Kurokawa, Yoko
- 2004 *Yearning for a Distant Music; consumption of Hawaiian music and dance in Japan*. PhD thesis. University of Hawai'i. Honolulu.
- Leach, Edmund Ronald
- 1964 "Anthropological aspects of language: animal categories and verbal abuse" in *New directions in the study of language*. Eric H. Lenneberg (ed.), pp23-63. 9th print. Cambridge Mass: MIT Press.
- Martine, Jean I
- 1978 *The Migrant Persence: Australian Responses 1947-1977*. Sydney: George Allen and Unwin.
- McNamara, J
- 2007 "The Effect of Modern marketing on Martial Arts and Traditional Martial Arts Culture." *The Sport Journal* (Quarterly refereed sports journal, published by the United States Sports Academy).
- Murphy, M. S. Donovan and E. Taylor
- 1997 *The Physical and Psychological Effects of Meditation: A review of Contemporary Research With a Comprehensive Bibliography 1931-1996*. Inst of Noetic Sciences (2nd publication).
- Moreton-Robinson, Alieen
- 2004 "The possessive logic of patriarchal white sovereignty: The High Court and the Yorta

Yorta decision.” *borderlands e-journal*, Volume 3 Number 2.

< http://www.borderlands.net.au/vol3no2_2004/moreton_possessive.htm > (8 December 2011)

Prince, Stephen

1991 *The Warrior's camera: the cinema of Akira Kurosawa*. Princeton: Princeton University Press.

Priest, G. and D. Young

2010 *Martial Arts and Philosophy*. Open Court.

Rocha, Cristina

2006 *Zen in Brazil: the quest for cosmopolitan modernity*. University of Hawai'i Press.

Review of the Post-Arrival Program and Services to Migrants (RPAPSA)

1978 *Migrant Services and Programs : Report of the Review of the Post-Arrival Program and Services to Migrants*. Canberra: Commonwealth of Australia.

Schmidt, R and G.R. Bristol

2005 “The influence of the Japanese Martial Disciplines on the Development of the United States Marine Corps Martial Arts program” in *Budo Perspectives*. Alexander Bennett (ed.), Kendo World Publications Ltd. Auckland: New Zealand. pp.269-286.

Stephen, P

1999 *The Warrior's camera: the cinema of Akira Kurosawa*. Princeton: Princeton University Press.

Suzuki, Sadami

2005 “Twentieth Century *Budō* and Mystic Experience” in *Budo Perspectives*. Alexander Bennett (ed.), Kendo World Publications Ltd. Auckland: New Zealand. pp15-43.

Wacquant, L

1995 “Pugs and Work: Bodily Capital and Bodily Labour among Professional Boxers.” *Body and Society* 1(1):65-93.

Yamada, Shoji

2001 “The Myth of Zen in the Art of Archery.” *Japanese Journal of Religious Studies* 28/1-2

Zarrilli, P.B

1998 *When the Body Becomes all Eyes: paradigms, discourses and practices of power in Kalarippayattu, A South Indian martial art*. Oxford: Oxford University Press.